

# 多文化主義と日系アメリカ人

## —ツールレイク強制収容所とそのインプリケーション—

本 多 善

### 要旨

本稿は、アメリカの多文化主義に登場する日系アメリカ人に焦点を当てつつ、従来の日系アメリカ移民研究を再考し、これまでアメリカ社会及び日本でも十分に注目されてこなかった人々とその経験を考察の対象とする。ツールレイク強制収容所は第二次世界大戦中に全米10か所に設置された、日本から移住した者及びその子孫（アメリカの市民権を持つ人々を含む）を収容した施設の一つであり、1943年に実施された忠誠心調査において、「不忠誠」とみなされた人々が収容された施設である。

はじめに、現在までの日系アメリカ人の歩みを紹介し、次に「多」からなる「一」を目指すアメリカ多文化主義の課題を示しながら、日系アメリカ人がその中でどのように表象されてきたのかを明らかにする。そして、2つの小説とツールレイク強制収容所に注目することで、当時の人々がアイデンティティの葛藤の中でいかに力強く生きてきたのかを記述する。グローバル化が進む現代社会において国民を統合するための言説は、多様性を志向する足枷となる。従来の日系アメリカ人とは異なる語りを通じて、多様性を志向することが本稿の目的である。

### キーワード

ツールレイク強制収容所、日系アメリカ人、多文化主義、アイデンティティ

## 1. はじめに

グローバリゼーションという言葉が一般的に使われるようになったのは1990年代に入ってからのことである<sup>1</sup>。筆者は大学院時代に、グローバリゼーションとは何かについて、洋書をあさり研究したことを覚えている。その多くの著書は、2000年代に

---

<sup>1</sup> 「グローバル化」や「グローバリゼーション」についての現象が語られるようになったのも1990年以降といわれている（池尾愛子（2017）『グローバリゼーションがわかる』創成社、1頁、小松憲治（2008）「グローバリゼーションの歴史的展望—その功罪を問う」『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』9巻、233頁）。

入ってからのものであり、人・モノ・カネ・情報が国境を越えて交じりあう現象を、当時の社会学者が読み解いてきたものであった。当時のグローバル研究の主流は、国家の役割の縮小と、画一化と多様化が同時に進んでいくとするものであった。多国籍企業や民間レベルでの交流の促進がこれを後押ししてきた。

しかしながら2020年代に入り、新型コロナウイルスによる移動と貿易の制限が加わると、国際社会の様相も少しずつ変容してきた。現代世界に目を向ければ、ロシアによるウクライナへの軍事侵攻、ミャンマー国軍のクーデターによる軍事政権の樹立、不安定で不確実な国際情勢下での国民を統合する動きが強まっている。また、自文化が他文化よりも優位にあるとする自民族中心主義的な言説も再興している。自民族中心主義は、自文化に対して、他文化を劣位にみる傾向があり、この思考様式が形成されると、他者との交流と対話の壁となり、見えざる敵を生産すると同時に自国民の統合を強化する。

このような国民統合の言説に対して、批判的視座を持つことが重要である。なぜならば、市民社会をよりよい方向に進めていくためには、多様性を尊重した社会を構築しなければならないからである。では、如何様にしてこの国民統合の言説に対して批判的視座を持つと同時に多様性を志向することができるのか。その一助となるのが、「国境を越えた人々」を通じた研究にある。

本稿は日本からアメリカへ移住した人々及びその子孫(以下、日系アメリカ人)を考察の対象とする。日系アメリカ人は世界的に研究されているが、その中でも第二次世界大戦下で、全米10か所に設置された強制収容所の中でも、十分に研究されてこなかったツールレイク強制収容所(Tule Lake Concentration Camp)に着目する。まず先行研究から日系アメリカ人の歩みを紹介する。日系アメリカ人は現在まで、多くの差別と葛藤の中で生きてきた。このことは、日本の多文化共生について考える上でも新たな視座を提供するであろう。

次に1980年代のアメリカにおける多文化主義論争の中で日系アメリカ人がどのように表象されてきたのかに着目する。このことは、多文化共生を志向する上で、少数派に属する文化を理解することの一助となる。更に、少数派の中の更に少数派の人々に注目するために、ナショナル・アイデンティティの葛藤を描いた2つの小説を紹介する。最後に、「不忠誠者」として語られてきたツールレイク強制収容所を考察するこ

とで、国民統合の言説に対して批判的視座を提供すると同時に、多文化社会を志向する事例研究の一助とする。

## 2. 日系アメリカ人の歩み

現在までの日系アメリカ人に関する研究において坂口満宏やハルミ・ペフはアメリカの日系アメリカ人に関する多くの資料を扱いながら、日系アメリカ人の歩みと現在の状況について社会学的アプローチを試みてきた<sup>2</sup>。これらの研究の多くは、外務省資料として残っている二次資料を中心に調査し、それぞれのフィールドと外務省資料との比較によって論じられている<sup>3</sup>。日系アメリカ人は現在まで排斥を受けながら、アメリカ社会を強く生き抜いてきたのである。以下がこれらの研究における日系移民史の年表である。

アメリカ日系移民史の年表(概略)<sup>4</sup>

1894	明治政府、移民保護法を制定し、移民取扱業務を民間に委託
1907	アメリカ西海岸で排日運動が強まる
1909	ハワイ・オアフ島で、不当労働に対する日系人の大ストライキ
1913	カリフォルニア州、外国人土地所有禁止法を制定(日系アメリカ人の無所有権)
1920	ハワイ・オアフ島で再び大ストライキ カリフォルニア州、「帰化不能外国人」の借地権を禁止する土地法を制定
1922	ケーブル法制定、これにより「帰化不能外国人」と結婚した妻も市民権喪失 <sup>5</sup>
1929	日系二世の組織、全米日系市民協会(JACL)組織される
1941	ハワイ真珠湾攻撃、開戦と同時に日系人の代表者をFBIが連行(逮捕者多数)
1942	2月、ルーズベルト大統領、日系を強制収容する命令を発令、日系人は強制的に駆り集められ、カリフォルニア、アイダホ、ワイオミング、ユタ、コロラド、アリゾナ、アーカンソーの計10ヶ所に110000人以上を収容
1943	ハワイ日系二世による第100大隊編成、442部隊も編成。ヨーロッパで活躍
1945	日本敗戦、日系人強制収容所から帰還
1982	デトロイトでヴィンセント・チンが日本人と間違われ殺害される
1990	強制収容に対する補償運動の勝利
2001	ワシントンで日系人記念碑が設立 テロ以後の国内でのアラブ系に対する暴行事件に対し、全米日系市民協会による抗議の声明を発表

1866年に日本では鎖国令が解かれ、これによって貿易商人、留学生などの海外渡航が許可されることとなる。1868年にはハワイへの出稼ぎ移民153名がホノルルに到着した<sup>6</sup>。その後、日本政府はハワイ王国と移民協定を結んで、1885年「官約移民」(政府と政府の契約によって行われた移民)を送る。第一回目の官約移民の数は944人であったとされる<sup>7</sup>。この制度によって後に多くの日系一世がハワイへそしてハワイからアメリカ本土へと移動していった。1884年から続いた「官約移民」は1900年に日本政府によって禁止される<sup>8</sup>。アメリカ政府は、多くの移民がハワイやカナダからアメリカに移り住んだことから、1900年に一時的にハワイやカナダからの移民を禁止する<sup>9</sup>。また1902年にはアメリカ政府によって制限つきながら渡航禁止が緩和され、再び日本からの移民が増加する<sup>10</sup>。

日露戦争が終結した1905年、カリフォルニア州で「黄禍論」が高まり、「日韓人排斥協会」が誕生する。この協会はアメリカの労働組合を中心として構成されていた。中国からの移民と同様に、日本からの移民も現地の労働者階級を中心として社会的抑圧を受けることとなる。翌年には、サンフランシスコで「東洋人学童排斥法案」が通過する<sup>11</sup>。日本の子供達を現地の公立学校に入学させない法案である。また1907年には約38000人の日系アメリカ人がハワイからアメリカへ移住したことから、当時の米大統領であったセオドア・ルーズベルトはハワイからの日系アメリカ人のアメリカ本土

---

<sup>2</sup> ベフ、ハルミ(2001)『日系アメリカ人の歩みと現在』人文書院

坂口満宏(2001)『日本人アメリカ移民史』不二出版

<sup>3</sup> 外務省(1972)『わが国民の海外発展-移住百年の歩み』外務省領事移住部(カリフォルニア大学バークレー校図書館より現在相愛大学図書館収蔵資料)

<sup>4</sup> 坂口満宏、前掲書、ベフ、ハルミ、前掲書、外務省、前掲書、今野敏彦、藤崎康夫(1986)『移民史Ⅲ』新泉社より筆者抜粋。下線は筆者による。

<sup>5</sup> ケーブル法とは、いかなるアメリカの市民権を持つ女性でも「帰化不能外国人」と結婚した場合、「アメリカ市民ではなくなる」と規定した法律である。

<sup>6</sup> 今野敏彦、藤崎康夫、前掲書、203頁

<sup>7</sup> 今野敏彦、藤崎康夫、前掲書、203頁

<sup>8</sup> 外務省、前掲書、622頁

<sup>9</sup> 今野敏彦、藤崎康夫、前掲書、409頁

<sup>10</sup> 今野敏彦、藤崎康夫、前掲書、409頁

<sup>11</sup> 今野敏彦、藤崎康夫、前掲書、409-410頁

への渡航禁止令を出す<sup>12</sup>。またこの年、アメリカ政府は「日米紳士協定」として日本政府による日本からの渡米に対する旅券発行の停止を盛り込む協定を結んだ。これにより一時的に移民は減少する<sup>13</sup>。さらに1913年にはカリフォルニア州で「排日土地所有禁止法」が制定された。これは移民に一切の土地所有が認められなくなる法であった<sup>14</sup>。農業を中心として生活する日系一世にとってこの土地法は死活問題であり、彼/彼女らは急遽、米本土で生まれた市民権を持つ自分たちの子供(二世)や現地の親日的な人々に土地を所有してもらおうよう要請した<sup>15</sup>。

1920年代に入ると反日の感情はますます強くなる。1920年に「写真結婚婦人」の渡米が禁止された<sup>16</sup>。また「第二次カリフォルニア州排日法」も制定され、これにより日系一世には土地の所有どころか、土地を借りることも禁止された<sup>17</sup>。1922年には米国大審院で日本人の帰化不能の判決が下された。日系一世は「帰化不能外国人」となったのである<sup>18</sup>。翌年には「排日移民法」が施行される。1941年には「日米修好通商条約」が撤廃され、日米の貿易が凍結されるとともに、両国は太平洋戦争へと突き進んだ<sup>19</sup>。アメリカでは1942年、フランクリン・ルーズベルト大統領が行政命令第9066号に署名、ロスアンジェルスの日系アメリカ人はマンザナ収容所へ移動、後に軍事地域の日系アメリカ人11万人の立ち退きを完了する<sup>20</sup>。1943年には日系二世による442部隊が編成され、米軍として前線で活躍し、これによって戦後、アメリカ政府による日系アメリカ人への対応が見直されることとなった<sup>21</sup>。1943年連邦警察官が全成人日

---

<sup>12</sup> 今野敏彦、藤崎康夫、前掲書、410頁

<sup>13</sup> 今野敏彦、藤崎康夫、前掲書、204頁

<sup>14</sup> 外務省、前掲書、625頁

<sup>15</sup> 坂口満宏、前掲書

<sup>16</sup> 写真結婚婦人は、写真花嫁 (picture bride) とも呼ばれる。日本からアメリカに移住した男性と写真・履歴書などを交換し、代理による結婚式を行い、入籍によって査証を発給され、渡航した者、またこのような習慣そのものを指す場合もある。

<sup>17</sup> 外務省領事移住部、前掲書、627頁

<sup>18</sup> 外務省領事移住部、前掲書、628頁

<sup>19</sup> 坂口満宏作成「年表・日系アメリカの歩み」、ベフ、ハルミ、前掲書、233頁

<sup>20</sup> ベフ、ハルミ、前掲書、233頁

<sup>21</sup> 今野敏彦、藤崎康夫、前掲書、206頁

系アメリカ人に面接し「忠誠心調査」を行っている<sup>22</sup>。後に終戦によって、収容所から日系アメリカ人は開放された。

アメリカ政府は1949年になって日系アメリカ人に対する法による「敵国人扱い」を終わらせた<sup>23</sup>。しかしこの年、日本人帰化法案が両院で通過したにも関わらず、トルーマン大統領は署名を拒否した<sup>24</sup>。日米で日米安全保障条約が発効された年、ウォルター・マッカランの「日本人帰化法」が制定された。これによって全人種にアメリカへの帰化権が与えられることとなった<sup>25</sup>。また1924年から続いた「排日移民法」をこの年に撤廃している<sup>26</sup>。全米の新聞に「ジャップ」の差別語の適用を禁止する記事を勧告したのもこの年である<sup>27</sup>。1976年、アメリカ政府は日系アメリカ人の立ち退きを命じた行政9066号を正式に廃棄した<sup>28</sup>。戦後31年が経過してからの出来事である。1982年にはデトロイトでロナルド・イーブンズが、日本人と間違えて中国系アメリカ人のヴィンセント・チンを暗殺する<sup>29</sup>。2001年にはワシントン特別地区において日系アメリカ人記念碑が建てられた<sup>30</sup>。9.11以降、アラブ系のアメリカ人に対する暴行事件があいつぎ、全米日系市民協会は真珠湾攻撃後の人種偏見と政治指導による誤りを繰り返さないように声明を発表した<sup>31</sup>。

以上が簡単なアメリカにおける日系アメリカ人の歩みである。日系アメリカ人は移住初期から現在に至るまで排斥の連続であった。歴史年表にある事象に限らず、日系アメリカ人の多くは、アメリカ社会の中で差別されてきた。こうした排斥が繰り返されていることは、多民族国家として形成されているアメリカの負の側面として理解される。

---

<sup>22</sup> 今野敏彦、藤崎康夫、前掲書、413頁

<sup>23</sup> 今野敏彦、藤崎康夫、前掲書、413頁

<sup>24</sup> 今野敏彦、藤崎康夫、前掲書、414頁

<sup>25</sup> 今野敏彦、藤崎康夫、前掲書、414頁

<sup>26</sup> 今野敏彦、藤崎康夫、前掲書、414頁

<sup>27</sup> 今野敏彦、藤崎康夫、前掲書、414頁

<sup>28</sup> ベフ、ハルミ、前掲書、234頁ベフ、ハルミ、前掲書、234頁

<sup>29</sup> 田中道代(2001)『アメリカの中のアジア』社会評論社、86-96頁

<sup>30</sup> ベフ、ハルミ、前掲書、235頁

<sup>31</sup> ベフ、ハルミ、前掲書、235頁

次にアメリカの建国の理念と多民族国家として形成していくまでの変遷をみていく。そして、多文化主義をめぐる議論の中で登場する日系アメリカ人に焦点を当てる。

### 3. 多文化主義をめぐる議論：多からなる一つのアメリカ

アメリカは建国以来、内部にかかえる多様性をいかに統合するかを、第一義に取り組んできた。その理由は多民族国家であり移民国家だからである。アメリカの国章には、“E Pluribus Unum”というラテン語が記されている。“Pluribus”は「複数」、 “Unum”は「一つ」を意味する。アメリカは多からなる一つの国の建設を目指してきた。日本では理解し難いように思われるが、人種のまたは民族的に異なる背景をもつ多様な人々が、寄り集まるアメリカにおいては、こうした共通の理念が必要となる。

一方、建国以来、多からなる一つのアメリカという理念があるにも関わらず、アメリカ内部において、エスニック・マイノリティが公平に扱われることはなかった。ネイティブ・アメリカンやアフリカ系アメリカ人、アジア系アメリカ人への排斥が戦後も続く中で、1960年代の公民権運動を皮切りに是正される機運が高まったのである。

建国当初のアメリカはイギリス系の住民が多数派を占めており、新しく到着した移民はそれに適応することが要求された。イギリス系の文化を主流とするアメリカで、多くの移民がこれに適応する形でアメリカ社会を形成していった。このことをアングロ適応論という。その中でも共通すべき理念が必要であった。多様な背景を持つ移民に対して、自由や平等などの普遍的、抽象的な理念を置き、国家のアイデンティティの基盤としてきたのがアメリカの特徴といえる。自由や平等といった普遍的概念をアメリカ的信条の第一義とし、こうした信条を共有する人をアメリカ人と定義してきたのである。

アメリカはしばしば人種のるつぼといわれる。諸々の民族的背景を有する人々が平等な立場で混じり合うことを意味する。1900年代初頭までは、こうした人種のるつぼにしても、アメリカ社会への適応にしても、移民が持つ属性は、いずれ変質し消滅することが前提とされていた。時間の経過とともに、複数からなるアメリカは一つのアメリカに徐々に変容し、各々の文化集団の特性は少しずつ主流派であるアングロ系文化へと融合されていくのが当然視されてきた。しかしながら、それぞれの文化集団の特性を変化させず残していくべきとする考え方が出てきた。これが文化的多元論であ

る<sup>32</sup>。文化的多元論は文化多元主義として提起されるようになり、初期の文化多元主義は、イギリス系以外の白人系文化の承認を求めたものである。1920年代に提起されるホラス・カレンによる文化多元主義がこのことである<sup>33</sup>。しかしながら、当時の文化多元主義は、すべてのマイノリティを含有する理念ではなかった。ネイティブ・アメリカンや黒人、アジア系などの非白人はその中に含まれることなく、同化主義的な意味合いの付加によってアメリカ社会内部でこの理念が浸透されていくことになる。文化多元主義は結局のところ、イギリス系文化を主流とした上で、その他の白人系文化の承認を求めたものであり、白人系アメリカ人には当然支持されるものであると同時に、白人系文化を主流とした社会を強化することにつながってしまったのである。戴エイカはこのことを、

文化多元主義が保守的な白人系アメリカ人にも支持されたのは、同化主義的な意味合いの付加により、西欧文化の優勢が保たれたからであろう。同化主義は文化多元主義の衣を借りて生き残ったといえるだろう<sup>34</sup>。

と述べ、文化多元主義も結局のところ、白人の文化を主流とみなす統合の一環にすぎないとしている。その後、1950年代以降に主張されるようになる第二期の文化的多元論は、黒人、アジア系、中南米を含む有色人種のマイノリティを含み、社会運動の次元でも展開されるようになる<sup>35</sup>。この概念は広く多文化主義に適応されるものとなった。

一方の多文化主義は、1980年代後半から教育の場を中心に用いられるようになる。公民権運動から長い時間を経てもなお、マイノリティの社会的地位は低いままであったことから、多文化教育を通じて、その地位向上を目指すべきであると考えた人々が増加した背景がある。またエスニック・グループの文化を第一義的とし、すべての文

---

<sup>32</sup> 西山隆行(2018)『アメリカ政治入門』東京大学出版会、64頁

<sup>33</sup> Kallen, H. 18-25 February 1915. "Democracy Versus the Melting Pot." *The Nation* 100 (2590), pp.190-94

<sup>34</sup> 戴エイカ(1999)『多文化主義とディアスポラ』明石書店、43-44頁

<sup>35</sup> 第二期の文化的多元論は多文化主義と呼ばれることもある。西山隆行、前掲書、65頁



化を相対化するものが多文化主義の原点であった。このような考え方は州によって大きな異なりをみせることになるが、最も大きな影響は1965年移民法の改正によるところが多い<sup>36</sup>。1965年移民法の改正により、移民人口は急激に増加し、南米諸国、中国、インド、ベトナム、フィリピンなどのアジア諸国が主要出身国となった<sup>37</sup>。その後、移民法は改正されながらも、現在に至るまでアメリカの移民政策の基本的な枠組みは維持されている。

文化の「多様性」を尊重する新たな概念としての多文化主義は、アメリカにおけるマジョリティーを中心とした従来の国民意識の変容を促そうとする試みから誕生した<sup>38</sup>。当時の社会背景は政治にしても文化にしても、アメリカの主流派はヨーロッパ系文化を中心とするものであった。多文化主義が議論されるまでは多様性が漠然と奨励されたが、アメリカ内部の社会ではマイノリティに対する差別構造が併存していた。多文化主義はこうした差別構造に対するアフリカ系やアジア系の差別を是正する運動によって生じたと言われる<sup>39</sup>。初期の多文化主義はマイノリティに属する民族や文化を包摂する多文化社会を目指した。多民族社会の新しい概念として多文化主義が注目されるようになったのである。しかし多文化主義はマイノリティの中のマイノリティや、グループすら持たない人々の文化的な裂け目を、「多文化」という寛容性を帯びた言葉の中に融合していくという国民統合の理論として打ち出されるようになった<sup>40</sup>。

その後、1990年代に入るとさらに多文化主義が促進されるようになる。この概念は、現在でも広くアメリカ社会において歓迎され続け、教育機関においても多文化主義の議論が積極的に行われている。特に高等教育においては多文化理解を進める教育の一

---

<sup>36</sup> 1965年移民法がもたらした影響について、西山は前掲書の中で詳細に分析している。特に注目に値するのは、人種・性別・国籍・出生地・居住地に基づく差別的措置を禁じ、高技能者とアメリカに居住している近親関係の者を優先的に受け入れたことである。これにより、アジア系移民、中南米系移民の増大をもたらした。西山隆行、前掲書、69-70頁

<sup>37</sup> 南川文里(2016)『アメリカ多文化社会論―「多からなる一つ」の系譜と現在』法律文化社

<sup>38</sup> 井上達夫(1999)「多文化主義の政治哲学―文化政治のトュリアーデ」油井大三郎、遠藤泰生編『多文化主義のアメリカ―揺らぐナショナル・アイデンティティ』東京大学出版会、88頁

<sup>39</sup> 戴エイカ、前掲書、38頁

<sup>40</sup> 油井大三郎「いま、なぜ多文化主義論争なのか」、油井大三郎、遠藤泰生編、前掲書

環として、様々なルーツを持つ民族を積極的に取り上げ、様々な文化から成り立つアメリカとして現在でも展開されているのである<sup>41</sup>。

なぜ多文化主義が周知され、大衆に受け入れられたのか。多文化主義の概念が広く受け入れられた理由には国内の多様な文化の理解を目的とした教育が強く影響していることにその特徴がある。「多文化」、「多民族」というキーワードを扱った教育のケース・スタディーとして、日系アメリカ人が登場するのである。

#### 4. 多文化主義の中の日系アメリカ人

多文化主義を浸透させるための多文化教育として1990年以降アメリカの歴史教科書に、歴史的に抑圧され続けたアフリカ系アメリカ人とマイノリティであるアメリカの日系アメリカ人が記載されることとなった<sup>42</sup>。

森茂は、多文化教育が実践してきたモデルとしての日系アメリカ人を「すべてのアメリカ人が共有できる歴史的経験であるという認識に立って、国民統合を志向する多文化教育の一つの象徴的事例であるといってよい」と指摘する<sup>43</sup>。森茂は日系アメリカ人がアメリカにおける歴史教科書において語られてきた理由に「社会統合」と「共有できる歴史」を挙げ、日系アメリカ人を通して「共有できるもの」つまり「共感的理解」をアメリカ人が持つことによって、「アメリカ人としての国民意識」を強調した<sup>44</sup>。そして、それを、彼/彼女らのアイデンティティがアメリカにあったとする一連の言説に由来するとした<sup>45</sup>。日系アメリカ人は2000年の国勢調査においてもその割合はわずか0.4%である。多くのマイノリティがいる中で、歴史教科書のモデルとして日系アメリカ人が紹介される。その理由は、実際に日系アメリカ人を取り上げる歴史教科

---

<sup>41</sup> Petersen, W. 1971. *Japanese Americans: Oppression and Success*. New York: Random House

<sup>42</sup> 森茂岳雄(1999)「アメリカの歴史教育における国民統合と多文化主義」油井大三郎・遠藤泰生編、前掲書、175-176頁

<sup>43</sup> 森茂岳雄、前掲書、176頁

<sup>44</sup> 森茂岳雄、前掲書、177頁

<sup>45</sup> Tanaka, C. 1982. *Go for Broke: A Pictorial History of the Japanese-American 100th Infantry Battalion and the 442th Regimental Combat Team*. Richmond, CA: Go for Broke, Inc

書の中で、日系アメリカ人が政府の不正義によって「強制収容」され、日系アメリカ人のアイデンティティが喪失されたという歴史的出来事を取り上げてきたからである。そして戦後、彼/彼女らが立ち上がり政府に対して「強制収容」に対する補償運動を行い、それによって補償運動の勝利がもたらされたという日系アメリカ人の歴史を記載したからであった。こうした日系アメリカ人の歴史はアメリカの歴史教科書のカリキュラムとして公式に位置づけられるようになる<sup>46</sup>。このようにしてアメリカにおける多文化主義は、移民という存在を重視し、多文化主義の中で各々の歴史的ルーツや共存性を再確認することを、実際には多文化教育の中で可能とさせてきたといえる。アメリカにおけるマイノリティの歴史は、現在も「多様な民族の貢献」という文脈で語られているのである。

しかし多文化主義者らが生産する日系アメリカ人に関する歴史的言説は、強制収容が行われるまでの日系アメリカ人のアイデンティティの葛藤を分析していない。リベラルを主張する多文化主義者らは、一部の日系二世がアメリカに対する忠誠を示し兵役につき、活躍してきたことを強調し、「国家への貢献」という善良な日系アメリカ人像を生産してきた。強制収容の記憶から生じた彼/彼女らの経験は、多文化主義による統合の理論の中で忘却されたままである。日系アメリカ人に生じたアイデンティティの揺れは、深く議論されないまま放置されている。また多文化主義は日系アメリカ人に生じたアイデンティティの葛藤を単なる過去の差別と偏見、そして政府の不正義という言葉で解決してしまったのである<sup>47</sup>。

## 5. 移民に生じるアイデンティティの葛藤：2つの小説とそのインプリケーション

1957年にジョン・オカダによって書かれた小説が『ノー・ノー・ボーイ』である<sup>48</sup>。オカダは1923年シアトルで日系二世として生まれた。ワシントン大学およびコロンビア大学を卒業後、第二次世界大戦に従軍している。この作品は、彼の生涯における唯

<sup>46</sup> Chang, T. 1991. "I Can Never Forget": Men of the 100th /442nd. Honolulu, HI: Sigi Productions, Inc

<sup>47</sup> 岡本智周 (2008) 『歴史教科書にみるアメリカ』学文社

<sup>48</sup> オカダ, ジョン (1979) 『ノー・ノー・ボーイ』中山容訳、昌文社

一の小説である。この作品は1979年に中山容によって邦訳されており、中山自身もこの作品に登場するイチローの複雑なアイデンティティの葛藤を

『ノー・ノー・ボーイ』に描かれている世界、まさに同時代人であるヤマダ・イチローの苦悩は、私たちの問題でもある。ひとつの民族文化をこえて、なにか新しいアイデンティティがあるだろうと放浪する孤独な魂がある。

と本書のあとがきで記述している。主人公であるイチローは、日本とアメリカという二つのナショナル・アイデンティティの狭間で葛藤に陥った人物だ。イチローのアイデンティティはアメリカ人でもなく日本人でもなかった。彼は誰なのか、何人なのかを追い求めてストーリーが展開される。彼の両親は日本からアメリカに移住した日系一世であった。日系一世はアメリカの市民権を持つことができなかった。彼/彼女らは敵性外国人としてアメリカ社会内部で差別された。そんな中、自分は日本人であるという自覚を持つ一世達も少なくなかった。その一人が、イチローの母であった。彼女は第二次世界大戦中に、全米の日系アメリカ人に対して行われた忠誠心調査において、イチローがノー・ノーと答えたことに誇りを持っていた。なぜならアメリカに忠誠を示さず、兵役にも就かなかった彼を、彼女は日系アメリカ人の誇りと思っていたからである。この小説の物語はイチローがノー・ノーと答えたことで強制収容所から刑務所に投獄され、戦争が終わり、出所したところからはじまる。イチローの母は、彼を、「あるべき日本人の姿」「理想的日本人」として見ており、彼女の友人に自慢げにイチローの話をしている。彼女は、戦争が終わっても、日本が負けたということを感じていない。「忠臣にして名誉ある日本国民である貴下へ」と書かれた手紙の内容を信じ、いつか日本軍がアメリカに「外地在留の皇国人民」を必ず迎えにくると信じて止まないのである。彼女はイチローを自分と同様に「善良な日本人」とみていた。なぜなら彼は兵役につかなかったからである。しかしイチローは違っていた。彼は日本人でもアメリカ人でも日系アメリカ人でもなかったのだ。

この作品は決して日系アメリカ人のみに感動を与えたのではない。この小説が再度出版される契機となったのは、アジア系アメリカ人らがこの小説の中に特別の価値を見出したからである。フランク・チンはこの小説のあとがきの中で自分たちを取り巻

く社会が、自分たち（アジア系アメリカ人）をコントロールしていると指摘している。

アジア系アメリカ人は自己憐憫と、「アジア系アメリカ（原文ママ）のアイデンティティ危機」という豪勢な理論のまわりをただうろろうしてきた。それは大量生産的の布教活動でわれわれを改宗させようとして以来ずーっとつづいている。文明は宗教を基盤にしている、一番いいのは、ひとつの神をあがめることだという考えが普及してからずーっとそうだ。キリスト経の宣教師はわれわれが同朋の女に接するのも否定し、キリスト教に改宗したものだけに婚姻を認めた。そうやってわれわれの人口までコントロールした。二十年代には、自分がだれなのかかわからないようなアジア系アメリカ人世代がうまれた、いまだにそのままだ。ジョン・オカダは、この「アイデンティティ」の危機が、トータルには現実であり、同時にどうしようもなくインチキだ、ということ、いまでも多くのキ色人間には強烈すぎて読むのがおそろしい（原文ママ）、この本で示している。

このように、チンはこの小説の重要性をアジア系アメリカ人が置かれている社会状況から説明している。チンは中国であれ、アメリカであれ、日本であれ、ナショナルな枠組みによって強制的に強られる、アイデンティティの付与を批判している。そしてこの本がそうしたナショナルなアイデンティティを強制してきた「現実」を描き出している点を称賛している。また同時に、こうしたアイデンティティの強制は、個人を規定し、個人を管理しようとする現実を「どうしようもなくインチキ」と表現することで、この作品が、マイノリティへのアイデンティティの強制に対して批判的な視座を提供しているとする。イチローは次のように述べている。

そしてそれから私は半分だけニッポン人の時代がきた。アメリカ生れで、アメリカで育ち、アメリカで教育をうけてしまえば、アメリカの街頭や家にいるアメリカ人の中に入って話したり、ののしったり、飲んだり、タバコを吸ったり、遊んだり、なぐりあったり、みたり聞いたりし、その一部になり、アメリカを愛せずにはいられなくなってるからだ。でもまだ愛し足りなかった。

イチローにアメリカ人として生きようとする意識が生まれたのは、やはり二世はアメリカの市民権を持っていて、その市民権を放棄することはできず、そしてアメリカ社会の中でアメリカ人として生きるよう仕向けられるような状況にあったからである。ごくごく普通の青年のように、英語で会話し、飲み、タバコを吸い、友人と絡むことが彼らの周囲の常識であったのである。しかしそれでもアメリカを愛したりなかったのである。

彼はニッポン人とアメリカ人との狭間でアイデンティティの葛藤に陥った。ナショナル・アイデンティティに回収されない決定不可能なイチロー自身のアイデンティティである。この小説を読み深めていくことで、イチロー自身、あるいは当時のマイノリティのアイデンティティの葛藤を理解することができる。日米という二項対立で決して片づけることができない、アイデンティティの不確実性をイチロー自身が表象しているのである。次に、もう一つの小説であるテレサ・ファンケの *The No-No Boys* に注目したい<sup>49</sup>。

ファンケはアメリカの市民に向けて第二次世界大戦で実際に生じた出来事を題材に小説を書いている人物である。ファンケによるこの小説、*The No-No Boys* は2008年に出版された。本書で登場する主人公はタイ・シモダという日系二世の少年である。そのモデルとなっている人物の一人が、筆者が2009年から2014年にかけてインタビューを行ってきた日系二世のマサオ・ヤマサキである。この本には邦訳がない。よって引用箇所については全て筆者による日本語訳を付している。本書は主に教員が多様性の理解とマイノリティの歴史を教えるための教材として使用されている。またこの小説は戦争の経験を子供たちに伝える教材としても使用されている。本書の主人公のモデルであるマサオ・ヤマサキもカリフォルニアを中心とした各所で、戦争体験の記憶を子供たちに語っており、ツールレイク強制収容所の経験を後世に残している人物でもある。本書はヤマサキ、ジョージ・ナカノ、メアリー・カワノの経験を元に小説化されており、三人の収容所に関わる体験を通して、タイ・シモダという主人公の物語で展開されている。著者であるファンケは本書の中で次のように述べている。

---

<sup>49</sup> Funke, T. 2008. *The No-No Boys*. Fort Collins, CO: Victory House Press

ホーム・フロント・ヒーローズ・シリーズから二冊目の本としてザ・ノー・ノー・ボーイズを出版したことには理由があります。私はそれまで第二次世界大戦を正しい戦争と学んできました。しかし、この出来事(第二次世界大戦中に日系移民に対して強制収容が行われたこと)を知り、それがはっきりと誤りであったと理解したのです。

ファンケがこの作品を執筆したのは、日系アメリカ人に対して行われた出来事をファンケ自身が学んだ際に正義の戦争とされていた第二次世界大戦に疑問を持ったからであった。正義の戦争とされた先の大戦を再考するために彼女はこの小説を執筆したのである。本書は「もしあなたが突然家を奪われ、そして知らない土地に連れて行かれたらどうしますか。」というファンケのメモからスタートする。次に第二次世界大戦における日系アメリカ人の歴史を概観し、続けて1943年のツールレイク強制収容所という特殊な収容所の出来事について説明している。アメリカに忠誠を示さなかった人々が集められたツールレイク強制収容所では様々な問題が生じていた。多くの日系アメリカ人が強制収容に対して憤りを感じており、収容所内で問題をおこしていたという事実であった。ツールレイク強制収容所には日本国を全面的に打ち出して抗議する集団を形成し監視員らに処罰されるグループや、監視員らに密告する「イヌ」とよばれるグループなどもいた。しばしばこの収容所ではグループ間の対立が生じていた。しかしファンケはもし自分に同じことが生じたならば絶対に許せないし、同じことをしたという。

彼女はヤマサキが「3年半も私は自分の国によって収容所に入れられた…そして私は全く何も悪いことをしていなかった」ことを紹介している。ヤマサキが彼自身の経験を語る理由は、「このような不正が二度と行われないようにするため」であると彼女は述べている。

主人公であるタイは、サクラメントの出身で両親は豆腐屋を営んでいた。暮らしはさほど豊かではなかったが、自分たちの家があり、ラジオがあり、遊び場と友人がたくさんいた。毎日野球をしたりして遊んでいた。しかし、1941年12月、日本による真珠湾攻撃によって日米開戦がはじまり、そのわずか二か月後に日系に対して強制収容が行われたのである。

この小説のシーンで、タイの兄であるベンは忠誠心調査にノーと答えると両親に言った。一方、父は彼に忠誠心調査にイエス<sup>50</sup>と答えるように何度も説得した。なぜなら父がアメリカ人としてのアイデンティティを持っているからではなかった。その理由は、父は子供たちに不自由のない生活を与えなかったからであった。ここでもし、成人であるベンが忠誠心調査にノー・ノーと答えたならば、彼は後の人生においても、「ジャップ」として差別されるにちがいないと考えていた。父はベンに戦略的にアメリカ人であるように振る舞えと言ったのである。タイやベンは日系二世であり、市民権をもっていた。国籍はアメリカであり、話す言葉は英語であったが、両親の日本語を理解し、そのルーツを理解していたのでありアメリカ人でありながら日本人でもあった。しかし次第にベンはアメリカ人であるよりも日本人であることを好んだのである。彼はもし自分がアメリカ人であるとすればなぜここに収容されているのか疑問に思っていた。

父はベンに「ここは監獄ではない。」というと、

まわりをみてみろよ。あの鉄柵が目に入らないのか。フェンスの上で監視する兵士が見えないのか。彼らは機関銃を向けて僕たちが逃げないように監視してるんだ。サクラメントに帰ることは許されているの。許可なしにここを出ていくことは許されているの。ならばここを何と呼べばいいんだ。

とベンが答え、自分達が置かれている強制収容所という状況に対して怒りを感じていることを述べた。そしてこのような状況にさせたアメリカを許すことができなかったのである。そして1943年に行われた忠誠心調査でアメリカに忠誠を示し、そのアメリカのために戦うなどベンには考えられなかったのである。その後、父は18歳になったベンに何度も忠誠心調査にイエス・イエスと答えるように促した。

しかし彼はその忠誠心調査にノー・ノーと答えたのである。そして家族は崩壊する危機に陥ったのである。というのもノー・ノーと答えた者は、ツールレイクに収容さ

---

<sup>50</sup> 「イエス」はアメリカでは神を意味するものであり、混乱を避けるために、本稿では、「はい」を「イエス」と表記する。



れるか、日本に送還されることになっていたからである。一方、ツールレイク収容所でイエス・イエスと答えた者は、別の収容所に移動させられた。つまりこのままでは、イエス・イエスと答えるタイの家族と、成人を迎えたベンとが離れ離れにされるという結果になる。そうこうしている中、ベンが監視員らに捕えられる。トムはタイの友人で、アメリカに忠誠を示した人物である。タイはトムに何度もイエス・イエスと答えるように促される。しかしタイはアイデンティティの狭間で葛藤する。

トムにとっては何の問題でもない。答えは決まっている。でもベンやそして今の僕にとってはまったくクリアになっていない。僕は父に反抗したくない。しかし日本のスタイルでは兄に反抗することも問題なんだ。トムは僕に自分のアイデンティティはどこにあるのかははっきりしろと言った。でもこんな状況でどうやってはっきりさせればいいんだ。トムもベンも頑固な父も正しい。でも同時に彼らは間違っている。

日本に忠誠を示すというベン、実際にアメリカに忠誠を示したトム、そして頑固な父に挟まれて、タイは自分自身のナショナルなアイデンティティの行方を模索するがみつけることはできなかった。この物語は決して国家への忠誠のみで片付けられない、アイデンティティの葛藤を示しているのである。

## 6. ツールレイク強制収容所とそのインプリケーション

日系二世はアメリカの歴史において重要な役割を担ってきた。第二次世界大戦と戦後のアメリカ社会を生き、激動の道を歩んできた。日系二世の両親である日系一世は、アメリカに移住した当初、アメリカの市民権を獲得することができなかった。一方、日系二世の多くは、アメリカで生まれ、既にアメリカの市民権を獲得していた。親は日本人で子はアメリカ人という状況から、世代間の葛藤が生じていた。更には、戦時中、日系アメリカ人に対して施行された強制収容、そして、戦後の公民権運動や差別是正運動を通じて、日系二世はアメリカ社会で奮闘した。

1941年の日米開戦以来、日系アメリカ人は強制収容所に収容され、終戦まで解放されることはなかった。こうした経験はアメリカの負の遺産となって後世に語り継がれ

ている。しかし、日系アメリカ人の歩みの中でまだ十分に明らかにされていないのが、ツールレイク強制収容所である。

ツールレイク強制収容所は第二次世界大戦中、日系アメリカ人を収容した施設の一つである。1942年、日系アメリカ人を収容するため、全米十か所に強制収容所が設置された。その中でもツールレイク強制収容所は別名、ツールレイク隔離収容所と呼ばれた。この収容所には、1943年に日系アメリカ人に対して実施された忠誠心調査においてアメリカに忠誠を示さなかった日系アメリカ人が集められたからである。全米に設置された各収容所から、「問題児」を隔離するための施設として機能していく。

筆者は2009年1月並びに2013年3月、カリフォルニア州サンフランシスコ・サクラメント・サンノゼを中心にツールレイク強制収容所の被収容者にインタビュー調査と実地調査を行い、加えてツールレイク強制収容所の資料を収集した。本研究は調査中に得られた資料を基に、日系移民史研究において十分に焦点が当てられてこなかったツールレイク強制収容所について述べる。

1941年12月8日、日本によるハワイの真珠湾攻撃によって米国に宣戦布告宣言が出され、その一か月後の1942年1月15日、全米の代表的一世ら約600人がモンタナ州ミゾラ抑留所へ収容された。その後、太平洋沿岸の日系アメリカ人が全米10カ所の強制収容所に収容された<sup>51</sup>。全米10カ所の中で特殊な収容所であったのがツールレイク強制収容所である。ツールレイク強制収容所に関する資料は大変少なく、ツールレイクを主眼として書かれた書物はほとんど存在していない。『米国日系アメリカ人百年史』においては、「日系アメリカ人の不忠誠組」や「日本主義団」を掲げた日系アメリカ人が集められた収容所として紹介されているが、詳細はあまり記述されていない<sup>52</sup>。また、『北米百年桜』は一世の半生を主眼としているため、強制収容所に関する情報が大変少なく、ツールレイク強制収容所は取り上げてすらいない。よって日本語文献におけるツールレイク強制収容所の研究は進んでいないのが現状である。

一方、英語文献においてはいくつかの資料が存在している。特に重要な資料としては *Second Kinenhi: Reflections on Tule Lake*<sup>53</sup> や *Tule Lake Revisited: A Brief*

---

<sup>51</sup> 伊藤一男 (1969) 『北米百年桜』北米百年桜実行委員会、1062頁

<sup>52</sup> 藤新一編 (1961) 『米国日系アメリカ人百年史』新日米新聞社、313頁

*History and Guide to the Tule Lake Concentration Camp Site*<sup>54</sup>が挙げられる。近年の運動として、ツールレイク強制収容所を後世に伝えようとする活動が盛んであり、この2冊も歴史を風化させないために、当時の被収容者や関係者らによって組織されるツールレイク委員会 (Tule Lake Committee) によって書かれたものである。

ツールレイクはカリフォルニア州の北部、インディアン古戦場として歴史的に名高い土地である。昔は湖底であったことから、樹木一本もない荒涼とした所である。砂嵐の厳しい土地で洗濯や調理などはほとんどバラックの中で行っていたことがわかっている。ツールレイク強制収容所を知らない現地の日系アメリカ人も多く、ましてや日本においてツールレイク強制収容所の資料がない。

ツールレイク強制収容所は現地の日系アメリカ人や歴史家らにとって、忠誠心調査における「不忠誠者」が集められた収容所という認識があった<sup>55</sup>。先に触れたように、このような理解は国家への忠誠か不忠誠かという歴史的言説によってつくられてきた。

ツールレイク強制収容所はカリフォルニア州モドック地区に建設された。当初のツールレイク強制収容所は問題と人々の不満に満ちていた。開所僅か5か月で人々が暴徒化した。理由は不十分な食糧事情であった<sup>56</sup>。その後、日常生活を送る上で必要不可欠な資材の不足により、多くのツールレイク被収容者は政府とその管理を行っていた戦時転住局 (War Relocation Authority, WRA、以下 WRA) に対して不満を持つようになる。その不満がピークとなったのは、1943年のことであった。この年、WRA が行った全ての日系アメリカ人に対する忠誠心調査によって、この収容所は大混乱となった。国家に対する忠誠心の判別によって、収容所内では政府への敵視と管理局に対する不満がピークにまで達したのである<sup>57</sup>。

---

<sup>53</sup> Tule Lake Committee. 2000. *Second Kinenhi: Reflections on Tule Lake*. San Francisco: Tule Lake Committee

<sup>54</sup> Takei, B. & Tachibana, J. 2012. *Tule Lake Revisited: A Brief History and Guide to the Tule Lake Concentration Camp Site*. San Francisco: Tule Lake Committee

<sup>55</sup> 加藤新一編 (1961) 『米国日系人百年史』新日米新聞社、313頁

<sup>56</sup> Kowta, M. 1976. Tule Lake War Relocation Project. In Friedman J, *Archaeological Overview for the Mt. Dome and Timbered Craters Regions, North Central California*, Appendix 1. MS on file, California Historic Resource Information System, Chico, CA: California State University

連邦政府の調査によるとツールレイク強制収容所は他の強制収容所と比較しても不忠誠とみなされた割合が最も多かった。例えば他の収容所では不忠誠という刻印を押された人々は全体の10%程であったのに対して、ツールレイク強制収容所では42%の人々が答えない、或いはNoと答えている<sup>58</sup>。これらの結果から1943年夏、この施設は他の収容所とは異なる名称となり、そして新たに厳重な警備と管理が行われた。実質的にはツールレイク強制収容所は強制収容所から隔離収容所へと施設の名称が変更された。当初、ポストン強制収容所も候補地の一つとして挙がっていた。しかしその数の多さからツールレイク強制収容所に決定したのであった。

忠誠心調査以前からのツールレイク被収容者は、他の強制収容所からツールレイク強制収容所にくる人々のためにブロックを解放する必要があった。の元収容者の内、6000人が他の強制収容所に移り、8500人が残った。そして8500人の内4000人が自ら残りたいとWRAに要求し、希望通り残ったのである<sup>59</sup>。

隔離収容所となった後、ツールレイク強制収容所では急いで新たなバラックの建設が進められた。1944年春には、収容者が18000人となり、WRAが管轄する収容所の中で最大となった。隔離所となったため、警備兵を増員し、装甲車を8台追加させた<sup>60</sup>。更に、兵士付きのタワーガード、鉄柵が増設された。これらは農場等の外部と隣接する境界に設置された。このように、ツールレイク強制収容所が隔離収容所となってから、警備の警戒レベルも引き上げられ、彼/彼女らは実質的に敵性外国人という扱いを超え、犯罪者以上の扱いを受けるようになったのである。しかし、ツールレイク被収容者は黙って抑圧された収容所生活を受動的に受け入れているわけではなかった<sup>61</sup>。収容所内では度重なるストライキが実施された。

---

<sup>57</sup> Burton, J. F. et al. 1999. Confinement and Ethnicity: An Overview of World War II Japanese American Relocation Sites. *Publication in Anthropology*. 74. Tucson, AZ: Western Archeological and Concentration Center, National Park Service, U.S. Department of the Interior, p.282

<sup>58</sup> Burton, J. F. et al., 前掲書、282頁

<sup>59</sup> Burton, J. F. et al., 前掲書、282頁

<sup>60</sup> Drinnon, R. 1987. *Keeper of Concentration Camps: Dillon S. Myer and American Racism*. Berkeley, CA: University of California Press, p.110

<sup>61</sup> Drinnon, R., 前掲書、110頁

ジミー・ヤマイチは1996年に発足したアメリカの非営利団体 Densho のインタビューでこのような状況を以下のように再考している<sup>62</sup>。

(収容所内の)農場でのストライキが、問題の一部でしたね。作物は植えられていたんですが、誰も収穫しない。養豚所も閉鎖された。食糧事情は悪くなる一方でした。それはもうひどくて、ある時なんか、各食堂に、カリフラワーが一箱ずつ届けられただけなんてこともありましたよ。300人用に一箱ですよ。それで花の部分の切って、葉っぱのところは残しておくんですね。葉っぱで何をしようっていうのか？考えたもので、それをきざんで、漬物を作ったんです。もう食べ物を要求して、大騒ぎになりました。少しずつ何か運ばれてくるんですが、とにかく皆を食べさせるために、何とかしないといけない。管理側は我々にちゃんとした食事を与えてないんですから、皆怒って、それで奉仕団(即時帰国奉仕団、親日派の団体)の人達ももっと力を持つようになったんですよ。「ほら、あいつらは戦わないだろ？管理側と戦わない。だから、こんな扱いを受けるんだよ。」と言うふうだね。そこで力をつけていったんです。管理側がますます弱くなる、陸軍はひどい食事を送ってくるので、彼らにしてみれば、もっとたくさんの人をグループに引き入れる武器が揃ったわけです。それをうまく利用しましたね。だから短期間の間に、あれだけたくさんの人を引き入れられたんです。それから、管理側が2百、3百人の奉仕団員を捕まえて、4百、5百人にもなりました。皆追い出して、収容所を落ち着けようというわけです。団員達は柵に入られて、それからビスマルクに送られて、それからニューメキシコのクリスタルシティーでしたね。グループ全体を分裂させて、国内中に散らばしたんです。それで問題解決ってわけです<sup>63</sup>。

---

<sup>62</sup> Densho は1996年に発足した非営利団体。第二次世界大戦中に投獄された日系アメリカ人の口述史を記録することを目標として発足された。Densho は、デジタル技術を使用して、第二次世界大戦で強制収容された日系アメリカ人に関する一次資料を保存し、アクセスできるようにしている。Densho、「Densho について」、<https://densho.org/about-densho/>、閲覧日2022年10月14日

ヤマイチは当時の食糧事情がいかに大変であったかを説明している。政府に対する批判が奉仕団への参加を誘導したと指摘している。しかしこうした改善ですら、管理側は受け入れず、逮捕・監禁・移送を行った。ツールレイク強制収容所という監獄の中に更なる監獄を建設していたことは従来の史実においても語られることがなかったのである。

更に政府は日系アメリカ人に対して市民権を放棄できる法律を制定し、日系アメリカ人に対してその意向を確認した。これによって、ツールレイク強制収容所では更なる混乱が生じたのである。ツールレイク強制収容所では、親日的な団体や、日本に帰国を希望する親も多かった<sup>64</sup>。また家族が別々にならないように、あえてそこに留まった人々も多かった。そのため、この市民権の放棄に関する調書はツールレイク強制収容所の家族や社会を二分するような混乱を与えたのである。5000人以上の二世がアメリカの市民権を放棄することになった。

筆者が2009年から実施してきたインタビュー調査においては、いくつかの重要な証言を得ることができた。例えばあるインタビューイは次のように指摘する。

ノー・ノーと答えてツールレイクに収容されたことは、個々人によってさまざまな理由があります。その要因はさまざまあり、決して不忠誠という一つの帰結に至ることはできません。私の経験からいえることは、忠誠か不忠誠かという問題ではなく、日米の狭間で悩み、生きるために抗議し続けたということでした。それが結果としてはアメリカ人である二世にとって、よくない歴史と認識されてしまったのです。

移民に生じる複雑なアイデンティティの葛藤を、第5章で述べた。小説でのイチローやタイのアイデンティティの葛藤と同様、まさに不忠誠という一つの帰結として、ツールレイク強制収容所の被収容者を語ることは困難である。日米の狭間にあって自

---

<sup>63</sup> Densho, 「日系アメリカ人：日系アメリカ人の辿ってきた道を追うオンライン歴史資料館、ジミー・ヤマイチ」、<https://ddr.densho.org/interviews/ddr-densho-1000-106-10/>、閲覧日2022年6月5日

<sup>64</sup> Tule Lake Committee、前掲書

らの窮状を示した人々、家族と共に生きることを選択した人々、その他諸々のケースにおいても、移民に生じるアイデンティティの葛藤を理解することができるのである。

## 7. おわりに

本研究は日系アメリカ人の歩みを概観しながら、ツールレイク強制収容所を考察し、忠誠心調査にノーと答えた人々や収容所内の出来事を明らかにした。本研究から、ツールレイク強制収容所では、支配／被支配の構造の中で被収容者らが抑圧されてきたことが明らかとなった。

現在のアメリカ社会、特に日系コミュニティにおいて、ツールレイク強制収容所の被収容者であった者は「ツーリアンズ」と呼ばれ、蔑視されてきた。一方、彼／彼女らは、国家による管理や支配に対して異議申し立てをしてきた。彼／彼女らは国家への忠誠を拒んだという単純な理解ではなく、強制的に収容されたことへの怒りと葛藤の中で、生き続けてきたのである。多様性を志向するためには、多様な背景を持つ人々への理解が求められる。本稿は、アメリカの多文化主義の中で語れてきた日系アメリカ人に登場することがなかったツールレイク強制収容所を再考した。二つの小説とツールレイク強制収容所の事例研究は、彼／彼女らのアイデンティティが決してナショナルな網の目だけに絡み取られることなく、アイデンティティの葛藤として、アメリカの多文化社会の中で存在していることを示唆しているのである。

## 参考文献

- 池尾愛子 (2017) 『グローバリゼーションがわかる』創成社  
伊藤一男 (1969) 『北米百年桜』北米百年桜実行委員会  
オカダ、ジョン (1979) 『ノー・ノー・ボーイ』中山容記、昌文社  
岡本智周 (2008) 『歴史教科書にみるアメリカ』学文社  
加藤新一編 (1961) 『米国日系人百年史』新日米新聞社  
外務省 (1972) 『わが国民の海外発展－移住百年の歩み』外務省領事移住部 (カリフォルニア大学バークレー校図書館より現在相愛大学図書館収蔵資料)  
小松憲治 (2008) 「グローバリゼーションの歴史的展望－その功罪を問う」『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』9巻、233-244頁  
今野敏彦、藤崎康夫 (1986) 『移民史Ⅲ』新泉社  
坂口満宏 (2001) 『日本人アメリカ移民史』不二出版  
戴エイカ (1999) 『多文化主義とディアスポラ』明石書店

- 田中道代 (2001) 『アメリカの中のアジア』 社会評論社
- 西山隆行 (2018) 『アメリカ政治入門』 東京大学出版会
- 藤新一編 (1961) 『米国日系アメリカ人百年史』 新日米新聞社
- ベフ, ハルミ (2001) 『日系アメリカ人の歩みと現在』 人文書院
- 南川文理 (2016) 『アメリカ多文化社会論－「多からなる一つ」の系譜と現在』 法律文化社
- 油井大三郎、遠藤泰生編『多文化主義のアメリカー揺らぐナショナル・アイデンティティー』  
東京大学出版会
- Burton, J. F. et al. 1999. Confinement and Ethnicity: An Overview of World War II Japanese American Relocation Sites. *Publication in Anthropology*. 74. Tucson, AZ: Western Archeological and Concentration Center, National Park Service, U.S. Department of the Interior
- Chang, T. 1991. "I Can Never Forget": *Men of the 100th /442nd*. Honolulu, HI: Sigi Productions, Inc
- Drinnon, R. 1987. *Keeper of Concentration Camps: Dillon S. Myer and American Racism*. Berkley, CA: University of California Press
- Funke, T. 2008. *The No-No Boys*. Fort Collins, CO: Victory House Press
- Kallen, H. 18-25 February 1915. "Democracy Versus the Melting Pot." *The Nation* 100 (2590). pp.190-94
- Kowta, M. 1976. Tule Lake War Relocation Project. In Friedman J, *Archaeological Overview for the Mt. Dome and Timbered Craters Regions, North Central California*, Appendix 1. MS on file, California Historic Resource Information System, Chico, CA: California State University
- Petersen, W. 1971. *Japanese Americans: Oppression and Success*. New York: Random House
- Tanaka, C. 1982. *Go for Broke: A Pictorial History of the Japanese-American 100th Infantry Battalion and the 442th Regimental Combat Team*. Richmond, CA: Go for Broke, Inc
- Tule Lake Committee. 2000. *Second Kinenhi: Reflections on Tule Lake*. San Francisco: Tule Lake Committee
- Takei, B. & Tachibana, J. 2012. *Tule Lake Revisited: A Brief History and Guide to the Tule Lake Concentration Camp Site*. San Francisco: Tule Lake Committee URL
- Densho, 「Densho について」、<https://densho.org/about-densho/>、閲覧日2022年10月14日
- Densho, 「日系アメリカ人：日系アメリカ人の辿ってきた道を追うオンライン歴史資料館、ジミー・ヤマイチ」、<https://ddr.densho.org/interviews/ddr-densho-1000-106-10/>、閲覧日2022年6月5日